

## 9 西郷の局物語

筆 者 石野 茂子

このお話は、時代の流れに翻弄されながらも、懸命にいき抜いた1人の女性の生涯を綴ったものであります。いつの世も不思議な縁で結ばれた人生がありますが、今回はその中でも、数奇な運命の中で、歴史に名を残すこととなった方の物語であります。

今から500年前、ここ西郷の地に、室町幕府、將軍足利義晴に仕え足利一門の今川義元の家来として仕えた戸塚忠春という武士が住んでいました。武士といっても自侍と呼ばれ、村に住んでいるお侍さんのことです。周囲に立派な塀を巡らし、大きな屋敷を構えていることから地名が「構江」となりこの屋敷が「構江屋敷」と呼ばれるようになりました。この時、戸塚忠春は今川義元が決めた相手と結婚して、嫡男・忠家と次男・心翁が生まれましたが、妻を亡くしました。そこで、今川義元は、三河の国八名郡西郷の土豪で西郷氏、五本松城主・西郷正勝の娘、貞との再婚を決めました。

1552年(天文21)3月3日の春暖かな節句の日、構江屋敷は朝からあわただしく人が出入りしていました。産み月を迎えたお貞に出産の兆しがあったからです。忠春は戸塚家には先妻が生んだ嫡男・忠家がおりますから、男子ではなく、可愛い女子が欲しいと願っておりました。御屋形様にお子が生まれるという話がまたたくまに家臣や領民に伝わり屋敷の前庭には多くの人達が集まって来ました。御屋形様は、仏間に正座しながらひたすらご先祖様、屋敷内に祀っている「いつき大菩薩様」に安産を祈りました。



上西郷付近



屋敷跡の「西郷齋宮」



戸塚 愛の誕生

やがて、お産婆さんが産着にくるまれた赤子を抱いて来ました。御屋形様が受け取り、顔をのぞくと願を掛けたとおり、可愛い女の子でした。「お貞、でかしたぞ。大菩薩様の再来じゃ」忠春は喜んでお貞に声を掛けました。赤子は「愛」と名付けられました。

地侍の忠春は戦に出掛けますが、家にいる限りはいつもお愛を可愛がりました。その分、母のお貞はしつこくお愛に接していました。戦乱の世を生き抜く知恵を付けさせたのでしょうか。領民からは、構

江屋敷のお姫様と見られていても、決して華美な身なりではなく、かえって質素な身なりをさせていました。食事の作法も厳しく、ご飯をこぼさないようにいつも注意されていました。



### 縁側で遊ぶ

ある秋の日暮れ、遊びに夢中でいつしか暗くなり梅さんがにぎり飯を子供たちに食べさせてくれました。お愛も喜んで食べていると、探しに来たお貞は「こんなに暗くなるまで遊んで！」といきなりお愛の手を引っ張りむりやり屋敷に連れ帰りました。お愛はびっくりして、「お母さま、痛い！」と大泣きをしました。お愛はにぎり飯を一口しか食べていないのに、その日の晩御飯はありませんでした。お愛の泣き声を聞いて、梅さんが心配して屋敷に謝りに来ました。「子ども等が、あんまり楽しそうだったもので、わしがひきとめただよ、どうか、堪忍してやってくれんかね」お貞は常日頃から外ずらが良く、「いつも遊んでもらってありがとう」と優しく言って、梅さんに、干菓子を持たせてやりました。お愛はいつしか泣きつかれて眠ってしまいました。

お愛が3歳になった年の9月に、戦に行っていた父の部隊が帰って来ることになり、お愛はうれしくてたまりませんでした。母から「お父様は疲れて帰って来るから、あまり甘えてはいけないよ」と言われ、おとなしく待っていました。

1554年(天文23) 蒸し暑い日の9月11日、忠春の供をして戦場へ出掛けて行った郎党が、「奥方様！大変でございます！」と早馬で屋敷に駆け込んで来ました。土ぼこりと



### 戸塚忠春戦死

郎党から知らせがあった次の日の夕方、戦死した戸塚忠春の亡骸は、愛馬「疾風」が曳く荷車に乗せられて来ました。構江屋敷は、一段と深い悲しみに沈みました。

汗で顔中真っ黒になった郎党に、急ぎ釣瓶の冷たい水をひしゃくで差し出しました。「御屋形様が亡くなりました！戦死しました！」男泣きに大声を張り上げました。お貞もこのときばかりは、お愛を見ると抱き寄せ、「お父様が、お父様が」とお愛の背中をさすりながら抱いて泣きくずれました。お愛も幼いながら事情が理解できて、悲しみを懸命にこらえながら「お父様！」と大声を出して泣きました。

この戦いには、家康も加わっておりその死を悼み、小刀で木片に戒名を彫ったという話が残っております。

お貞は、忠春の戦死、葬儀と悲しみが続き多忙であったが、日々、仏間で忠春の冥福を祈っておりました。その後、戸塚家の嫡男、忠家が妻を迎え独立するのを見届けて、お愛を連れて東三河の実家に戻るため構江屋敷を離れました。出立する朝、「お愛や、よく見ておくんだよ。お父様と暮らした構江のお家を」輿に揺られて、貞はお愛に声を掛けました。



### 構江の別れ

「お母さま、構江の空も、山も、川も、神社も、私大好き」輿の中から無邪気にお愛は叫びました。貞は、倉真川・五社神社を見ながら、外の温かい日差しを感じ、うとうとしていました。

「お母様。ほら、あそこ」突然身体をゆすられ、お愛が指さす方を見ると、昨日まで一緒に暮らした構江の人たちが見送りにきて手を振っていました。「梅さーん、みっちゃん、さとちゃん、けいちゃん元気だね」お愛は、輿から身を乗り出して手を振りました。

城に戻ったころ、西郷家は今川義元に従っており平和に過ごしておりました。ところが、桶間の戦いで義元が死んでしまったため家康は今川を離れ、三河の人達を味方にするため動きまわりました。家康は、お貞と家康家臣の服部正尚との再婚を決めました。1561年(永禄4)10歳になったお愛は母に連れられ服部家に入りました。養女となったお愛は、面長、色白、富士額、羽二重肌、髪も黒くて多く鼻すじが通り、二重瞼の色香漂う愛らしい娘に育っていました。



### 薬学知識

服部正尚は、伊賀忍者を統括し家康に重用され服部家を率いました。家康の側近であり、身辺警護をし、戦いでは最新兵器を使い高い技術力で戦功をあげていました。服部正尚は、養父ながらお愛をこよなく可愛がりました。お愛の利発さに養父は読書をすすめました。服部家は忍者の統領たる武将の家で、武術・薬物・医術に関する書物が多くあり、お愛は読書に没頭しました。のちにお愛は、忍者の出身では、と噂されるほど、忍者の秘めたる知識に精通していました。

母、貞は一日中読書をしているお愛が心配になりました。そんなおり、実家の西郷家の嫡男義勝の妻が、幼い子を残して亡くなりました。父の西郷正勝は、お貞に、甥の西郷義勝にお愛が嫁ぐよう命じました。母はお愛に「貴女も知っている母の実家だから安心して暮らせる」と、従兄弟の義勝に嫁ぐよう話しました。服部家はお愛を大切に扱ってくれましたが、お愛は喜んで嫁ぐ決心をしました。お愛17歳でした。城主の妻として先妻の子、重勝を育てる後妻として、忙しく働く日々となりました。



夫、義勝は戦場で兵士が負傷した時に備え、城への薬売りの行商を許可しておりました。親しい薬売りには、なかなか博学の者もいて、これから漢方薬を理解するには、外国語がわからなければと色々教えてくれました。お愛も学ぶことが大好きで、興味を持って義勝と一緒に漢学を学びました。

お愛は、先妻の残した長男、重勝を育てつつ、すぐに娘が生まれ、続いて次男、勝忠が生まれました。

### 漢学の知識

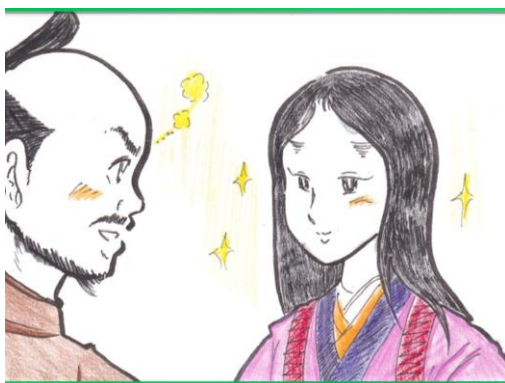
しかし、翌年、夫、義勝 21 歳の時、武田一門の叔父の清員らと共に、竹広の戦いで義勝討ち死にの報が届き、義勝との結婚生活は、わずか 3 年で終わりました。

20 歳で未亡人となったお愛は重勝、勝忠、お藤を育てながらそのまま五本松城で暮らしました。

お愛は学ぶ事が好きで、かなりの漢学の知識も身に付け、母からも女人としてのたしなみも厳しく教えられ、深い教養を身に付けました。長い黒髪、きりっとした目元、長く通った鼻すじ、おちょぼ口と美人の条件を備えておりました。側近の若い武士は、子供二人に武芸・馬術等、戦術を教え、娘は守役と共に、カルタや双六で遊びました。そうして、側にはいつも子ども達を見守る暖かいお愛の眼がありました。お愛自身も子ども達のため、前向きに母としての責任を果たそうとして、戦乱の世を一生懸命生きようと思いました。

母、貞は再婚以来、服部正尚に尽くしてきました。服部家は家康に従い浜松城下に移りました。浜松城は侍女が不足しており、お貞は、侍女に選ばれました。浜松城の西郡の局に懸命に仕え、服部家とも連絡を取り合い、その仕事ぶりに西郡の局の信頼を深く得て行きました。そんな折、お愛が夫を亡くしたことを知り、不憫な娘の幸せを願う母は、西郡の局も一緒に侍女として働かせてもらうため話をしました。西郡の局は内々に家康の男子を生める側室を探していたが見つからず、お愛の話を聞いて興味を持ち対面しました。

お愛 27 歳となり、あふれるばかりの女ざかりの美しさに西郡の局は喜び、側室として家



康へのお目通りを手配するのですでした。お愛は、悲しみばかりの人生で希望を失いかけていましたが、子ども等の成長を願い慎ましく生きておりました。西郡の局から侍女ではなく母から側室の話を聞き、夢のような話でした。それは子ども達の未来が拓けるという母親の一途な思いでした。

西郡の局から話を聞いていた家康は、早速会って自分で確認しようと慎重でした。しかし、お愛の気品ある聡明さと賢さ美貌に圧倒され、戦乱の世を母として健気に生きるお愛に惹かれました。

### 西郷の局

家康 37 歳、お愛の方 27 歳、西郡の局に案内され、家康の側室となりました。家康はお愛の方の、聡明さと美貌に圧倒されましたが、それにもまして学問にも秀でていることに、

ことのほか喜びました。家康から「学問は誰から学んだのか」と聞かれ、亡父・忠春の家臣からひらがなを習い、養父・服部正尚の武術・薬物・医術の読書、亡夫・義勝の知り合いの薬売りから、これから外国語が必要になると言われ漢学を学んだことを話すと、家康は大いに喜び教養の深さにも感動し、お愛の方に対する関心を深めました。

家康にとってお愛の方は理想の女性であり、お愛の方もひたすら家康に尽くし、献身的に



仕えて、半年後、秀忠を身ごもりました。1579年（天正7）4月7日安産で秀忠が生まれました。家康は「でかしたぞ。お愛。これで徳川も3人目の男子が生まれた。世継ぎに恵まれた」と大声で褒め、祝杯を挙げて喜びました。翌、1580年（天正8）9月10日に家康の4男忠吉が生まれました。相次いで2人の男子に恵まれた家康は上機嫌でした。お愛の方の側室により、戸塚家も西郷家も他の同格の家臣に比べると格段に優遇されて行きました。

### 秀忠・忠吉の誕生

東海一の実力者となった家康は、浜松城から駿府城へ移りお愛の方も従いました。改修となった駿府城には秀吉の妹、朝日姫が家康と再婚し、正室として奥の実権を握っていました。お愛の方は家康の子の母ですが、子ども達は別屋敷で将来の将軍を担う厳しい教育を受けていました。西郷の局は容姿、気立ても良く、教養も豊かでその上温和で誠実な人柄は、家康



の信望が特に厚く、家康最愛の側室といわれ、城内の家臣や侍女たちから親しまれていました。しかし奥の側室からは、嫉妬や妬みが多くありました。忠吉出産後、体力が回復せず体調の衰えとともに周りからの精神的苦痛にも悩み、病んでおりました。母、お貞の方や秀忠・忠吉が枕元に、度々来るようになると「学問と武芸を学び、御父上の国造りを受け継ぎ立派な武将になるよう」諭しました。

### 家康の跡を継ぐ武将に

そうして、多くの苦労が重なり1589年（天正17）5月19日に38歳の短い生涯を終えました。

徳川幕府第二代将軍となった秀忠は、優しかった母との団らんの日々を思い出し、「我が母こそ、現世を超越した観世音菩薩様であった」と、家康死後、龍泉寺を移転し、駿府一の壮大な大寺院を建立しました。寺名に宝台院を加え金米山宝台院龍泉寺としました。また母

へ、女人最高の従一位を追贈して戒名を、ほうだいいんでんいつぽんだいふじんしょう よていじゅだいぜんじょう に「宝台院殿一品大夫人 松 誉貞樹大禅定尼」と改

めました。静岡市葵区常磐町の宝台院にある西郷の局のお墓は、桜の樹木に囲まれ、春に満開の桜が咲きそろいます。

この掛川で生まれた西郷の局が、徳川家康と出会い、3男秀忠・4男忠吉が誕生して、秀忠は徳川幕府第二代将軍となり、江戸幕府260余年の歴史が開花しました。



### 寶臺院境内の西郷の局墓碑

2022年（令和4）3月3日西郷の局生誕470年を記念して、掛川市城内にある龍華院境内に西郷の局の石碑が建立され盛大に石碑建立セレモニーが開催されました。石碑は東向きに建立され、目の前に孫の三代将軍徳川家光の大猷院霊屋があり、西郷の局の優しい眼差しが降り注がれている。



### 西郷の局の石碑

## 寶臺院西郷の局「お愛さま」年表

| 西暦（和暦）      | 年齢        | 内 容                                                                                               |
|-------------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1552（天文21）年 | 1         | お愛 3月3日 掛川市上西郷(構江)で誕生                                                                             |
| 1554（天文23）年 | 3         | 父 戸塚忠春 駿河・刈屋川の合戦で戦死                                                                               |
| 1556（弘治 2）年 | 5         | 母 貞は お愛を連れて 東三河の実家に戻る                                                                             |
| 1560（永禄 3）年 | 9         | 桶狭間の戦いで 今川義元戦死                                                                                    |
| 1561（永禄 4）年 | 10        | 徳川家康の家臣の服部正尚と貞が再婚し<br>お愛は服部家の養女となる                                                                |
| 1568（永禄11）年 | 17        | 母の実家 従兄弟の西郷義勝の 後妻となる                                                                              |
| 1570（元亀 元）年 | 19        | 先妻の子重勝を育て娘が誕生 翌年勝忠が誕生                                                                             |
| 1571（元亀 2）年 | 20        | 愛知県竹広の戦いで 夫 義勝戦死                                                                                  |
| 1578（天正 6）年 | 27        | 家康の側室 西郷の局となる                                                                                     |
| 1579（天正 7）年 | 28        | 4月 7日 3男秀忠誕生                                                                                      |
| 1580（天正 8）年 | 29        | 9月10日 4男忠吉誕生                                                                                      |
| 1586（天正14）年 | 35        | 徳川家康 西郷の局と共に駿府城へ移る                                                                                |
| 1589（天正17）年 | 38        | 西郷の局5月19日駿府城にて逝去<br>5月24日駿府・龍泉寺で葬儀                                                                |
| 1605（慶長10）年 | 没後<br>16年 | 3男秀忠 徳川第二代将軍（征夷大将軍）となる                                                                            |
| 1628（寛永 5）年 | 没後<br>39年 | 将軍秀忠 駿府にて母 西郷の局の大法要を行い<br>龍泉寺の寺名を 金米山宝台院龍泉寺の院号を授け<br>母に女人最高の「従一位」を追贈して<br>「宝台院殿一品大夫人松誉貞樹大禅定尼」と改める |

〈参考文献〉

- 掛川市老連他『中遠の伝承故事』（中部民生事務所掛川支所、1977）  
『ふる里かけがわ』（掛川市教育委員会、1979）  
『ふる里かけがわ第3集』（掛川市教育委員会、1980）  
『徳川實紀 第一編』（吉川弘文館、1981）  
『徳川實紀 第二編』（吉川弘文館、1981）  
本間三郎『江戸城と大奥』（学習研究社、1988）  
『葵三代と静岡ジパングの王様徳川家康』（静岡新聞社、2000）  
石田広太郎『私の回想録』（私家版、2001）  
『伝承写真館日本の食文化・東海』（農村漁村文化協会、2006）  
小楠和正『浜松時代の徳川家康の研究』（中部印刷、2009）  
小和田哲男『詳細図説 家康記』（人物往来社 2010）  
小穴康二『日本史ヒロイン 1000 人』（世界文化社 2011）  
『宝台院誌』（宝台院、2013）  
『江戸新聞第6巻 1～9』（ポプラ社、2013）  
関七郎『考証 西郷局』（アビサレ、2015）  
堀内永人『家康の恋と西郷ノ局の生涯』（長倉書店、2018）  
たぶんやぶんこ『お愛の方西郷局』（西郷のヒナプロジェクト）  
中山正晴『西郷局の出自と構江屋敷についての一考察』

〈写真〉

- （写真①）上西郷付近 2018/8/30 筆者撮影  
（写真②）西郷齋宮 2018/8/30 筆者撮影  
（写真③）寶臺院境内の西郷の局墓碑 2018/04/18 筆者撮影  
（写真④）西郷の局の石碑 2022/04/19 筆者撮影

（イラスト①～⑨横山忠志）